平成三十年度
群馬県立女子大学　文学部　総合教養学科
推薦入学試験問題

小論文

試験時間は、九十分です。中途退室は認めません。途中で気分が悪くなった場合は、黙って手を上げてください。

問題用紙は二枚です。他に下書き用の白紙が二枚入っています。
解答用紙は二枚あります。それぞれが配られたら、指示に従って解答用紙の所定の欄に受験番号、氏名を記入してください。
試験開始の合図があるまで表紙をめくって問題を見てはいけません。

解答用紙の所定の欄に受験番号、氏名を記入し終えたら、静かに試験の開始を待ってください。

本文傍線部に「最も実用的に書くと云うことが、即ち芸術的の手腕を要するところ」とあるが、著者は小説というものをどのように捉えているのか。本文を踏まえながら、あなた自身の考えを一〇〇〇字以内で述べなさい。

文章を以て現わす芸術は小説でありますが、しかし芸術と云うものは生活を離れて存在するものではなく、或る意味では何よりも生活と密接な関係があるのでありますから、小説に使う文章こそ最も実際に即したものでなければなりません。もし皆さんが小説には何か特別な云い方や書き方があるとお思いになるのでしたら、試みに現代の小説を執れでもよいから読んで御覧なさい。小説に使う文章で、他のいわゆる実用に役立たない文章はなく、実用に使う文章で、小説に役立たないものはないと云うことが、じきお分りになるのであります。次に小説の文章の例として志賀直哉氏の「城の崎にて」の一節を引用してみましょう。

自分の部屋は二階で隣のない割に静かな座敷だつた。読み書きに疲れるとよく縁の椅子に出た。脇が玄関の屋根で、それが家へ接続する所が羽目になつてゐる。其羽目の中に蜂の巣があるらしい、虎斑の大きな肥つた蜂が天気さへよければ朝から暮近くまで毎日忙しさうに働いてゐた。蜂は羽目のあはひから摩抜けて出ると一ト先づ玄関の屋根に下りた。其処で羽根や触角を前足や後足で丁寧に調べると少し歩きまはる奴もあるが、直ぐ細長い羽根を両方へシツカリと張つてぶーんと飛び立つ。飛び立つと急に早くなつて飛んで行く。植込みの八つ手の花が丁度満開で蜂はそれに群つてゐた。自分は退屈するとよく欄干から蜂の出入りを眺めてゐた。

或朝の事、自分は一疋の蜂が玄関の屋根で死んで居るのを見つけた。足は腹の下にちぢこまつて、触角はダラシなく顔へたれ下がつて了つた。他の蜂は一向冷淡だつた。巣の出入りに忙しくその脇を這ひまはるが全く拘泥する様子はなかつた。忙しく立働いてゐる蜂は如何にも生きてゐる物といふ感じを与へた。その脇に一疋、朝も昼も夕も見る度に一つ所に全く動かずに俯向きに転がつてゐるのを見ると、それが又如何にも死んだものといふ感じを与へるのだ。それは三日程その儘になつてゐた。それは見てゐて如何にも静かな感じを与へた。淋しかつた。他の蜂が皆巣に入つて仕舞つた日暮、冷たい瓦の上に一つ残つた死骸を見る事は淋しかつた。然しそれは如何にも静か

だった。

故芥川龍之介氏はこの「城の崎にて」を志賀氏の作品中の最もすぐれたものの一つに数えていましたが、こう云う文章は実用的でないと云うことが出来ましょうか。ここには温泉へ湯治に来ている人間が、宿の二階から蜂の死骸を見ている気持と、その死骸の様子とが描かれているのですが、それが簡単な言葉で、はっきりと現わされています。ところで、こう云う風に簡単な言葉で明瞭に物を描き出す技倆が、実用の文章においても同様に大切なのであります。この文章の中には、何もむずかしい言葉や云い廻しは使ってない。普通にわれわれが日記を附けたり、手紙を書いたりする時と同じ文句、同じ云い方である。それでいてこの作者は、まことに細かいところまで写し取っている。私が点を打った部分を読むと、一匹の蜂の動作を仔細に観察して、ほんとうに見た通りを書いていることが分る。そうしてその書いてあることが、と云うのは、この場合には蜂の動作でありますが、それがはっきりと読者に伝わるのは、出来るだけ無駄を切り捨てて、不必要な言葉を省いてあるからであります。たとえば終りの方の「それは見てゐて如何にも静かな感じを与へた。」の次に、いきなり「淋しかつた。」と入れてありますが、「自分は」と云うような主格を置かずにただ「淋しかつた。」とあるのが、よく利いています。またその次の「他の蜂が皆巣に入つて仕舞つた日暮、冷たい瓦の上に一つ残つた死骸を見る事は云々」のところも、普通なら「日が暮れると、他の蜂は皆巣に入ってしまって、その死骸だけが冷たい瓦の上に一つ残っていたが、それを見ると、」と云う風に書きそうなところですが、こんな風に短く引き締め、しかも引き締めたために一層印象がはっきりするように書けている。「華を去り実に就く」とはこう云う書き方のことであって、簡にして要を得ているのですから、このくらい実用的な文章はありません。されば、**最も実用的に書くと云うことが、即ち芸術的の手腕を要するところなので**、これがなかなか容易に出来る業ではないのであります。

但し、今の志賀氏の文章を見ると、「淋しかつた」と云う言葉が二度、「静かな」と云う形容詞が二度、繰り返し使ってありますが、この繰り返しは静かさや淋しさを出すために有効な手段でありまして、決して無駄ではないのであります。その理由はすぐ次の段に述べることとしまして、こう云う技巧こそ芸術的と云えますけれども、しかしそれとても、やはり実用の目的に背馳するものではありません。**実用文においても、こう云う技巧があればあった方がよいのであります。**

谷崎潤一郎「文章読本」（『陰翳礼賛・文章読本』新潮社、二〇一六年所収）